



中上健次作品研究 ――「政治と文学」の終わりにから 「近代文学の終わり」まで ――

松田, 樹

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2022-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8212号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008212>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目

中上健次作品研究

——「政治と文学」の終わりから「近代文学の終り」まで——

氏 名 : 松田樹

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程 文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 梶尾文武 准教授

(副) 樋口大祐 教授

(副) 奥村弘 教授

博士論文要旨

題目：中上健次作品研究

——「政治と文学」の終わりから「近代文学の終り」まで——

氏名：松田樹

中上健次は一九四六年に生まれ、九二年に四六歳の若さで没した日本の小説家である。和歌山県新宮市の被差別部落で生まれたこの作家は、「路地」という言葉を用いて部落問題を自作に取り込みつつ、故郷の風土に根差した小説世界を創り上げた。

彼がデビューを果たした六〇年代後半は、戦後文学を牽引してきた「政治と文学」というパラダイムが暗礁に乗り上げた時代である。そして、中上の死に際しては、批評家の柄谷行人によって「近代文学の終り」が唱えられた。本論は、六九年における文芸誌デビューから遺作に至るまでの二三年間の中上の執筆活動を土台に、七〇年代以降の日本文学の歴史を描き出すことを目的としている。六部一〇章からなるその梗概は、以下の通りである。

第一部第一章では、『紀州 木の国・根の国物語』（七八年）という中上が故郷の被差別部落を経巡ったルポルタージュを取り上げ、小説家としての立場から自身の出自、すなわち被差別部落の生まれを主題化した中上の立場を確認しておく。「シリーズ『差別』鼎談—狭山裁判を基軸として」という野間宏と安岡章太郎をホストとした鼎談に中上が登壇したことが『紀州』連載の契機となった。狭山裁判闘争や臼井吉見による『事故のてんまつ』の筆禍事件が話題を読んでいたこの時代には、部落問題との関わりが文学者によって盛んに主題化されていた。中上が『紀州』において試みているのは、野間や安岡といった戦後文学者とは異なる形で、かつ政治運動の文脈に回収されずに自身の出自を取り上げることに他ならなかった。第一部第一章では、自身の出自を俎上に乗せる際に見られる作家の逡巡とそれを小説の場に引き受けてゆくプロセスを『紀州』から仔細に検討し、中上の執筆活動を総体的に検討してゆくための視座を定めたい。

第二部では、故郷や出自といった主題を明示的に語る以前の、六〇年代末から七〇年代初頭に執筆された中上の初期作品を考察の対象に指定する。第二部第二章では、中上の文壇デビュー作「一番はじめの出来事」（六九年）を取り上げる。ここでは、「想像力」によって同時代の「政治」に「文学」の側から対峙しようとした大江健三郎の乗り越えが試みられている。第二部第二章では、中上と六〇年代末の学生運動との邂逅を起点としながらデビュー作を読解することで、彼の出発点における「政治と文学」という命題への距離感を明らかにしている。第二部第三章では、芥川賞の初候補作である「十九歳の地図」（七三年）を論じる。本作の主人公がテロを通じて否定しようとする現実には、故郷や肉親との関係性がトラウマのように張り付いている。第二部第三章では、前作から一転して都会の青年を主人公に据えた「十九歳の地図」を考察対象に掲げ、出自や故郷といった要素を本格的に導入する以前の中上作品がそれらの要素を否定的に浮かび上がらせていることを論じる。

第三部では、郷里を舞台に載せる試みが実践されるとともに、作中に差別の主題が盛り込まれてゆく七〇年代中頃の中期作品に焦点を当てる。七〇年代中盤には戦後文学者が「政治と文学」の並立を前提としてきたことに反旗を翻し、自己の身辺的な話題に焦点を当てる古井由吉・後藤明生・黒井千次といった所謂「内向の世代」の作家が旺盛な活躍を見せている。後続する中上に迫られたのは、同じく自己の身辺的な話題から出発しながらも、そこに自身の出自が含み込む部落差別という政治的な問いをいかに導入するかという困難な試みに他ならなかった。第三部第四章では、中上が故郷の紀伊半島を初めて本格的に舞台に載せた『化粧』（七八年）という連作短篇に着目し、そこに導入された古典の引用とい

う方法が同時に差別の主題を呼び込んでいることを論じる。それを通じて短篇集『化粧』が中上の執筆活動の転換点に位置する所以を具体的に論証した。第三部第五章では、前章の議論を引き継ぎ、『化粧』の収録作の多くが『風景』（一九六〇～一九七六）という同人雑誌に掲載されている点に焦点を当てた。「文壇の崩壊」が叫ばれる戦後の言説空間のなかで、作家の舟橋聖一を中心に運営された同誌では「文壇」が延命していたとしばしば評される。芥川賞受賞前後に中上は『風景』に短篇を連載することで作家としての技量を磨くと同時に、文壇ジャーナリズムに対する自身のイメージを立ち上げていった。『風景』掲載作や周辺の人脈を追うことで、「最後の文士」とも言われる中上の作家像生成の過程を跡付けた。

第四部では、八〇年代初頭に発表された二つの連作短篇集を取り上げる。この時代には故郷を舞台にした作品世界が構築されてゆく反面、現実のその地は同和対策事業によって大規模な開発が行われている。第四部第六章では、中上が「路地」と名付けた故郷の被差別部落を舞台に、産婆オリウノオバと夭折する若者たちの姿を描いた連作短篇集『千年の愉楽』（八二年）を扱う。発表以来、本作は中上が故郷を神話的な相貌の下に描き出した作品として評価されてきた。ところが、作中には明治期の身分解放令や昭和恐慌など被差別部落が被ってきた苦難の歴史が取り入れられており、それに対してオリウノオバと中本の一統と呼ばれる若者たちは対照的な態度を示している。第四部第六章では、作の表面にあしらわれた神話的な相貌を批判的に検討し、オリウノオバによる若衆への焦点化に潜む問題を分析している。第四部第七章では、前章と同じく八〇年代初頭に執筆された連作短篇集『熊野集』（八四年）を取り上げる。『千年の愉楽』に並行して書き継がれた本作は、「路地」のモデルとなった現実の被差別部落が解体してゆく様を記した短篇と、それとは対照的に古典を題材に「路地」という神話的な作品世界を構築してゆく短篇の併置によって成立している。従来の研究では見落とされてきたものの、両系列を貫くのは先行作を入れ子のように組み込んだメタフィクショナルな構成である。第四部第七章では、その観点から雑多な性格が指摘されてきた『熊野集』を総合的に分析し、この小説を中期作品の総決算として位置付けている。

第五部では、中上の後期作品を特徴付けるアジアとサブカルチャーへの志向に注目し、従来の中上研究では周縁化されてきた要素に焦点を当てた。八〇年代初頭から中上は「路地」という名称によって郷里を囲い込むことで差別を永続化してしまう危険性を自覚し、次第にそれを水平的な方向な広がりへと開いてゆく。第五部第八章では、母の半生をモデルとした中上初の女性主人公の長篇小説『鳳仙花』（八〇年）とそれを継承したと目される後年の『物語ソウル』（八四年）という二作品を取り上げている。『鳳仙花』と『物語ソウル』を併せて分析することで、中上の女性主人公の作品を特徴付けるメロドラマ的な性格を明らかにするとともに、その点を切り口に八〇年代以降の作家のアジアへの接近に孕まれる問題点を浮き彫りにした。第五部第九章では、遺作となった『異族』（九三年）と『南回帰船』（九一年）を取り上げる。従来の研究では、『異族』は「中上最大の問題作」（渡部直己）とは評されるものの詳細な分析は行われておらず、劇画作品の原作である『南回帰船』に至ってはそのサブカルチャーとして相貌ゆえにほとんど考察の対象に取り上げられてこなかった。第五部第九章では、八〇年代末から九〇年代初頭に執筆された未完の二作を取り上げることで、晩年の中上が志向していた反米アジア主義と歴史修正主義という危うい側面を抽出している。

最後に、第六部付論では中上の作品を通じて展開してきた歴史的な展望を、より大きな戦後文学史の見通しの下に位置付けている。付論で取り上げるのは、中上に先行して部落問題にも積極的に取り組んだ井上光晴と大西巨人という二人の戦後文学者である。七〇年代以降、井上が「政治と文学」という戦後派の命題を遺産継承しようとしていたのに対し

て、大西は繰り返し井上の「政治と文学」の理解を批判している。大西が『天路の奈落』（八四年）や『三位一体の神話』（九二年）といった作品で志向しているのは、むしろ「政治」と「文学」が等価に置かれるような境位である。その意味で、九二年における中上の死に際して「近代文学の終り」を唱えた柄谷行人が、一時期大西の戦後文学批判に目を留めていた点は注目に値する。第六部付論では、本論文を締め括るに当たって、中上に即して展開してきた内容が「政治と文学」という戦後的パラダイムの終わりから「近代文学の終り」が論じられるまでの約二〇余年間であったことを再確認し、中上健次の執筆活動が有していた文学史的な意義を改めて問うている。